



雨のスローン広場に惹かれて

最近、新聞記事で目を引く内容がめつさり少なくなりました。玄関の新聞受けてポトツと音がしたので、やおら暖かい布団から起き出す。パラパラと捲り進むうちに、カラー写真入りの記事に目が止まりました。「埋もれた画家の魅力知って」名古屋の美術収集家 堀田さん

若い頃住んでいたロンドンにあるスローン広場の絵と、このタイトルがジャーナリズムの道から留学の仕事に転職して23年。最近、社会問題化している不登校、引きこもり問題の解決策として、留学を軸足にした転地教育の実践を、カナダ、イギリス、ニュージーランドで続けている。短期留学から長期留学を繋いだ子供達が、管理教育で眠っていた能力を発芽させ、次々と夢を形にしているのは嬉しい限り。その夢は宇宙飛行士、エア・アテンダント、服飾デザイナー、シンガー、旅行作家などと幅広い。

日本にいた時の彼らは感性が鋭く、鋭い嗅覚で鬱陶しい空気を嗅ぎ取り、居場所が見つからなくて自分の殻に閉じこもるケースが多かった。カンセリングを重ねながら、個別の問題や悩みをすくい出し、まだ発芽していない能力は何かなどを掘り起こすのが私の仕事だ。

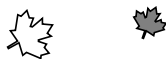
このやり方と、埋もれた画家を掘り起こし、自分の目だけを頼りに、その絵に将来があるかないかの目利き役を続ける堀田氏の姿勢に、合い通じるものを感じ、ギャラリーKANIまで足を運ぶ事になった。

よく同じ仕事を23年も続けていると感心されるが、昔とった杵柄の取材力で、外に出られない子供の秘め事をいかに引き出すか、毎回のカウンセリングは真剣勝負で同じものは一つとしてない。そして、転地教育で発芽すると確信を持った種を見出した時の喜びは、それまでの苦勞を一気に吹き飛ばす。

5月のゴールデン・ウィーク明けに、イギリスの提携校訪問をするが恒例になっているが、その2週間の後半は美術館やアート・ギャラリー周りに当てている。

羨ましいのは、誰に邪魔される事なく、好きな絵の前で寝そべった椅子に座ってじっくりと鑑賞している子供達の姿である。そして、本物の絵を子供達に無料で鑑賞させるイギリスと言う国の質の高さ。それに比べ経済だけをグローバル化させた日本は、父親不在の家庭を増大させ、それが不登校や引きこもり言う社会問題をつくり出す要因の一つになっている。教育は国家100年の計と言われるが、次代を担う人材づくりの教育予算を削り、旧態依然とした管理教育を続ける日本の場当たり的な政治。

堀田氏は言う。絵は再評価してやると、輝きたすのが嬉しい。私は管理教育で眠る子供の能力を掘り起こし、留学で夢を実現する子供達の姿を見るのが嬉しくて、後方支援ナビゲーターを続けて行く。



Michi recommends 響く本『家族のイメージ』



亀口憲治 (かめぐち・けんじ)

1948年、福岡県に生まれる。
1975年、九州大学大学院博士課程終了、同大学助手
1980～82年、フルブライト研究員(ニューヨーク州立大学)
1995年、福岡教育大学教授
1998年、東京大学大学院教育学研究科教授
1999年、東京大学附属心理教育相談室室長、学校臨床センター分室長
【役職】国際家族心理学学会日本代表、日本家族心理学会常任理事、家族心理士、家族相談士認定機構常任理事、日本家族カウンセリング協会副会長、NPO法人システム心理研究所代表
【主著】家族心理学事典(共著、金子書房、1999年) 家族システムの心理学(北大路書房、1992年) 現代家族への臨床的接近(ミネルヴァ書房、1997年) 家族臨床心理学(東京大学出版会、2000年) 現代のエスプリ愛と癒し(編著、至文社、1994年) ミニチュアの家族療法セミナー(監訳、金剛出版、2000年)ほか

私の臨床経験からすれば、それら不登校家族が抱える心理的問題は、けつして彼らに特有のものではなく、平均的な家族にも共通した構造をもっているように思われなければならない。

その共通の心理的構造は、父親が情緒的に孤立し、母子が密着した家族のかたち「イメージ」に集約される。つまり、家庭内での母子は線や面のつながりでイメージされるのに対して、父親は孤立した「点」のような存在としてイメージされるのだ。一方、家庭外での父親をイメージすると、彼らはいずれも所属する会社等の「ウチ」組織にがっちり組み込まれ揺らぐことのない忠誠心を期待される。

周知のように、不登校が最も多く発生する年齢段階は、中学一年生のころである。まさしく、思春期の真っ只中であり、不登校のみならず、非行や学業不振などの問題も多発する時期で、親の資質が試される時期でもある。それまで、不問に付されていた親子間の問題だけでなく、夫婦間の問題、あるいは双方の実家の祖父母との問題も表面化してくることも少なくない。この時期は一般的にも、祖父母、両親、子どもの三世代が同

時に危機を体験しがちな家族発達の移行期なのである。

一般的には、子どもが中学生になり、母親に反抗的になって手に負えなくなったような年齢段階で、「父親の出番」となり、それまで子育ての陰に隠れていた父親が、突然矢面に立たされる機会が多いようだ。しかし、これでは出番として遅すぎる。現代の子育て期の父親にとって最適な出番とは、これまで述べてきた小学校中学年すなわち思春期に入る直前の時期ではないだろうか。

この時期の父親には、消滅しつつある「子どもだけの世界」に、子どもたちが踏み込むためのガイド役を果たしてほしい。なぜなら、多くの父親は自分自身の子ども時代には、子ども世界での心踊るような体験をいくつももっているはずだから。

もちろん、下手をしようとガイドがいつまでも、子どもの世界に居座ってしまう危険性がないわけではない。しかし、年長の子どもが年下の子どもをひっぱたいていくような集団での遊びの機会がない現状では、やはり父親がその代役を要所で務める必要がある。子どもがその要領さえつかめば、あとは子ども同士で遊べるようになる。ほんの少し

の手ほどきでも、この年齢の子どもたちには魅力的に感じられるからだ。

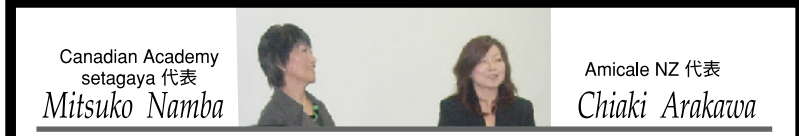
父親の出番は、昔の遊びの手ほどきに限ったものではない。先にも述べたように、今では職場で働く父親の姿を、子どもたちが直接に見ることができなくなっている。父親の職場を見学することができれば言うことはないが、それができなくとも、家の中のちょっとした大工仕事を子どもにも手伝わせながらやってみるの効果的だ。成長しつつある子どもたちにとっては、「子どもの世界とは違う大人の世界」にも大いに好奇心をもっているからである。

これまで強調してきた父親の出番のタイミングは、父親だけでは判断しきれない面がある。こそぞというタイミングは、むしろ母親のほうが確につかんでいる場合が多い。子どもとの接触が多い母親ならではの資質と言える。

結局は、夫婦のパートナーシップの質が問われることになる。父親が最適なタイミングで子どもの前に登場していくためには、母親が自分の身を引く、ベストのタイミングを心得ておかねばならない。また、そのためには母親が子どもと自分の関係や心理的距離の長短を正確につかんでいる必要がある。

MAPLE NEWS

2008年 Vol.62



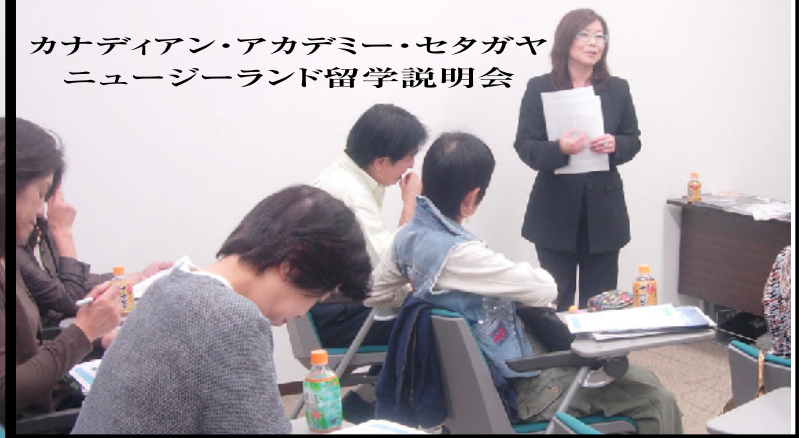
Canadian Academy setagaya 代表 Mitsuko Namba

Amicale NZ 代表 Chiaki Arakawa

ついにオークランドに提携校誕生

これまでイギリス、カナダで展開して来た、長期留学のためのサポート体制が整いました。異文化の中、留学生の心理状態を考慮し、最初は田舎の提携校で学習させ、その後は本人が希望すれば、都会の提携校に移し国際人を育てるのがカナディアンアカデミーセタガヤのやり方です。

田舎の提携校に留まるか、歩まえに出て都会の提携校に移るか、あくまで本人の判断に任せます。また日本の通信制高校の勉強をしながら、17歳になれば入学できるホスピタリティー専門学校・NSIAとも提携関係が成立。この学校に入学すれば、将来ニュージーランドでの就職も可能。また第2の人生をニュージーランドで考えている転職組は、総合調理師とパティシエコースに入学すれば、配偶者やパートナーには、オープン・ワークビザ、子供など扶養家族には年齢に応じて必要なビザが支給される画期的なコースです。



カナディアン・アカデミー・セタガヤ ニュージーランド留学説明会